

## 春を迎えて ― 一期一会の六年

津軽の厳しい冬が終わり、待ち望んだ春を迎える季節となった。

今年もまた、弘前城の桜が満開になることだろう。

巡る季節の中で、私たちの公認心理師養成課程もまた、一つの節目を迎えている。

本課程の始まりは、令和二年四月、コロナ禍のただ中であつた。

先の見えない状況の中での歩みの始まりであり、教育も運営も手探りの連続であつた。

日本の医学部において公認心理師養成課程を設置したのは本学が二校目であり、現在に至るまで極めて稀有な試みである。

医学科、保健学科に続いて設置された本学科は、医学部の中で心理専門職を養成するという新たな役割を担うものであつた。

医療職の専門性が確立された環境の中で、心理職の位置づけを築いていくことは決して容易ではなく、当初は戸惑い、試行錯誤、そして大きな苦難の連続であつた。

既存の枠組みの中に新たな専門領域を根づかせていく、困難でありながらも意義深い挑戦であつた。

しかし六年の歳月を経て、私たちは確かな変化を実感している。

現在では、保健学研究科の一員として確かに受け入れられ、私たち自身もまた、教育・研究の両面において大学に貢献し得る存在へと成長しつつある。

この歩みは、決して一足飛びに得られたものではなく、日々の積み重ねの中で培われてきたものである。

とりわけ、公認心理師養成に不可欠な実習体制の構築には、多大な労力を要した。

現在もお道半ばにあり、体制を着実に軌道に乗せるべく、日々試行錯誤を重ねている。心理職としての専門性を有する教員の尽力はもとより、地域の病院や諸施設、大学附属病院における実習指導者の先生方からも、多くのご支援を賜った。

現場の深い理解と協力があってこそ、本課程の教育は成り立っている。

また、保健学科の先生方をはじめ、学内の諸先生方、さらには大学本部の先生方にも、さまざまな形でご支援とご理解を賜った。

学科・大学院の設置申請に際しては、事務部にも多大なるお力添えをいただいた。

新たな養成課程として歩み始めた私たちを温かく受け入れ、見守り、ともに大学の教育・研究を支えてくださったことに、ここに改めて深く感謝申し上げます。

学生たちもまた、その過程を間近で見つめながら、ともに歩んできた。

困難な状況を共有する中で、互いに支え合い、ときには喜びや達成感を分かち合う経験を重ねてきた。

その時間は、単なる教育課程を超えた、かけがえのないものとなった。

同時に、研究活動も徐々に活性化し、学会発表や論文刊行において着実に実績を積み重ねてきている。

教育と研究の両輪が、ようやく安定して機能し始めた実感がある。

研究者として、論文を一本一本積み重ねていくことは、言うまでもなく重要で意義深い営みである。

しかしこの六年間を通して、学生たちとの日々の関わりの中でこそ得られる、もう一つの仕事の意味を深く実感している。

学生の成長や、そこに生まれる喜びや希望に触れること。

それは論文の形として残るものではないが、人と人との間に確かに蓄積され、やがて長く持続していくものである。

とりわけ一期生をはじめとする創設期の学生たちは、何もないところから学科をともに作り上げてきた、特別な存在である。

教員にとっても学生にとっても、すべてが手探りであったその時間は、他に代えがたい経験となった。

この創設期をともに歩んできた学生たちは、これからも私たちにとって特別な存在であり続けるだろう。

三月二十三日、保健学研究科学位記伝達式において、修了生一人一人に学位記を手渡した。

言葉を交わさずとも見つめ合ったその瞬間、互いに心が通じ合っているという確かな思いがあった。

教職員が注いできた愛情と情熱は、学生たちの成長となって結実し、その姿は私たち自身にも確かな喜びとして返ってくる。

それは相互の信頼関係の中で育まれる、かけがえのない循環である。

人生は、出会いと別れの繰り返しである。

その一つ一つは、まさに一期一会であり、同じ形で再び訪れることはない。

だからこそ、その時間をともに過ごした意味は、何よりも大切なものとして心に刻まれ続ける。

この六年間、学生たちとともに、螺旋階段を昇るように、一つの周期を全力で駆け抜けてきた。

そして辿り着いたこの地点において思うのは、いま再び新たな出発点に立っているということである。

ここからまた、新しい歩みが始まる。

令和八年三月吉日

心理支援科学科長 小河妙子

最後に、本養成課程の設置にご尽力いただいた当時の研究科長、齋藤陽子先生のお名前をここに記し、深く感謝の意を表します。